

友枝敏雄著 : 『モダンの終焉と秩序形成』 : 有斐閣, 1998年, A5判, 214頁, 2,800円

今枝, 法之
松山大学人文学部 : 教員 : 社会理論, 現代社会論

<https://doi.org/10.15017/922>

出版情報 : 人間科学共生社会学. 2, pp.175-178, 2002-02-15. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :

友枝敏雄著

『モダンの終焉と秩序形成』

(有斐閣, 1998年, A 5判, 214頁, 2,800円)

今 枝 法 之

本書は、はしがきにもあるように、「私たちの生きている社会はこれからどうなっていくのか」という、きわめて明確な問題設定のもとに執筆されている。いくつかの章は過去に発表された論考に基づいているとはいえ、全体としてほとんど書き下ろしといってもよいほどに内容的に整序されている。著者の基本的な立場である社会システム論の観点から、社会変動と社会秩序の問題があますところなく、そして明快に論じられており、テキストとしても研究書としてもきわめて意義深い作品に仕上がっているといえよう。

第1章「ヨーロッパ近代と社会学」第1節では、ヨーロッパ近代における「個人」と「社会」の発見、および社会、自然、人間という独立領域の形成という点から説き起こし、社会科学ならびに社会学の特性について解説している。社会学を近代の自己認識の学、自己言及的な学問としてはっきりと特徴づけている点に評者は共感を覚えた。第2節では、「自然主義—反自然主義」、「ミクロー—マクロ」、「歴史主義—反歴史主義」という分析枠組みを用いて、マルクスの唯物史観、ウェーバーの歴史社会理論、ウォーラステインの世界システム論といった、社会変動論を整理・評価している。

第2章「モダン社会の歴史的位相」においては、第1節でスペンサーにはじまり、サムナー、ウォード、ヴェブレン、そして文化人類学者のホワイト、サーリンズ、サーヴィスを経て、パーソンズ、ルーマンへといたる、社会進化論の系譜を跡づけている。第2節では、主として市民社会論の歴史を追認している。それはホブズから、アダム・スミス、ヘーゲル、マルクス、デュルケム、テンニースを経て、日本における市民社会論、さらにはハーバーマスの市民的公共性の議論にまで及んでいる。民主化、産業化、世俗化（合理化）、個人主義化を担う主体から成り立つ社会としての市民社会に関する議論が、今日ではそれが内包する西欧中心史観と西欧個人主義によって、停滞しているという。それに対して、著者は「市民社会の理想を再生するためには」、ハーバーマスの市民的公共性の考え方が「きわめて有効」だとしている。第3節では、テンニース、デュルケム、ヴェーバー、高田保馬、大塚久雄、丸山眞男、ロストウ、ベンディックス、リーヴィー、パーソンズ、アイゼンシュタットへとつながる、近代化論の展開を明らかにしている。現在では従属理論や世界システム論の登場により、近代化論の限界が露呈している。一国主義的な視点からの近代化論ではもはや不十分なのである。ただし、近代化論は開発途上国においては今なお一定の影響力を保っているとされる。

第3章「システムとしての社会」は、社会システム論の展開と社会システム論における構造

と変動の概念を扱っている。第1節ではシステム論の初歩的な説明（たとえば、システムとは一定の境界内での諸要素間の相互作用のことであるといった事柄）から始まり、続けてパーソンズ、ルーマン、ハーバーマス、ギデンズといった論者の所説を検討している。第2節では社会システムにおける構造概念と変動論について考察している。著者は「パターンとしての構造」と「規則としての構造」という二つの構造概念を認めるにいたっている。また、「社会変動とは、社会システムの状態の変動である」としている。

第4章「社会システムと秩序」では、社会システム分析の共時態レベルの課題として、秩序問題を俎上に載せている。第1節はパーソンズの規範主義的な秩序問題解決策を検討している。ホブズ的秩序問題に関するパーソンズの解決策には、論点先取の誤謬と権力現象の等閑視といった難点があることが指摘される。（著者はこの二つの難点を克服するために、ギデンズの構造化概念の導入が有効だと考えている。）さらにパーソンズの現代社会理論そのものが戦後のパックス・アメリカナの落とし子であるとして、その歴史的制約性をも明らかにしている。第2節は、秩序問題考察に関して、「ミクローマクロ」、「主観的—客観的」というアプローチの対立軸を設定し、それらを組み合わせて四類型にアプローチを整理している。各アプローチの批判的検討をつうじて、客観的アプローチは合理的な選択にもとづく交換的な秩序を認識しており、主観的なアプローチは意味構成的な秩序を認識しているということが確認される。そのうえで、ハーバーマスのコミュニケーション行為理論は前者の延長線上に、ギデンズの構造化理論は後者の延長線上にそれぞれ位置づけられると推論している。第3節では、モダン社会に取って代わりつつあるポストモダン社会の秩序がどのようなものになるのか、ということ考察している。結論的にはポストモダン社会における意味の公共性を提示することが課題であるとしている。

以上のように、本書は近代の社会システム論・社会理論の壮大な歴史を系統立ててコンパクトにまとめているだけでなく、今後の社会理論の歩むべき針路をも明瞭に示している。

それゆえ、ポストモダン化が進行している今日状況において、本書は社会学の来し方行く末を熟考する上できわめて示唆的で貴重な作品であるといえよう。事実、評者は本書を読むことで勉強させていただくところが多かった。沈滞気味の社会理論の現況に、著者は活を入れてくれたということができる。

評者は社会システム論の門外漢なので、専門的で骨太な批評をすることはできない。また、完成度の高い本書からはひたすら学ばせていただいたというのが実情である。しかし、書評としては何らかのコメントが必要である。そこで苦しまぎれに重箱の隅をつつくような疑問点をいくつか提出させていただくことをお許し願いたい。

まず第1章で、社会変動論や社会理論を分析するための枠組みとして、「自然主義—反自然主義」、「ミクローマクロ」、「歴史主義—反歴史主義」という対立軸が設定されていたのだが、歴史主義に関して、それと歴史法則主義との違いを示していただきたかった。たとえば、K・ポパーは歴史法則主義を批判していたのであり、著者のいう歴史主義（社会変動の説明として

歴史的説明を承認する立場)を批判してはいないのではないだろうか。また、レヴィーストロースの構造主義は基本的に社会変動論(通時態分析)とは考えにくい。それは社会の共時態分析のツールであると考えられるのであり、そうであるからこそコードの浮遊やゆらぎを主張するポスト構造主義の挑戦を受けなければならなかったといえるのではないだろうか。さらに反歴史主義的な社会変動論なるものがそもそも存在するのか、という素朴な疑問も感じた。社会変動の説明は多かれ少なかれ歴史に言及せざるをえないからである。その意味では、「歴史主義—反歴史主義」とするよりも「歴史法則主義—反歴史法則主義」としたほうが、議論が明確化したのではないかと思われるのである。

次に第2章で、今日では市民社会論が取り上げられなくなった、と記されているが、1990年代以降、東欧市民革命、NPO・NGOなどの市民社会組織の活性化、近年の住民投票に見られるような直接民主制や、電子民主主義(eポリティクス)の進展などにより、グローバルな多次元的レベルでの市民社会論が興隆しつつあるのではないだろうか。また、個人主義を市民社会論の本質的な要素と考えることは困難になっているとされるが、むしろ個人主義を本質的前提としたうえで市民的公共性が構想されるのではないだろうか、という印象を持った。

第3章では、「パターンとしての構造」概念と、「規則としての構造」概念の両者を著者は認めている。しかし、「パターンとしての構造」概念は、ギデンズがパーソンズに関して指摘したように、「システム」概念と「構造」概念との混同ということになりはしないか、という懸念が生じた。一定の境界内における諸要素の相互行為のパターンは、まさにシステムであり、構造とは区別したほうがよいのではないだろうか。もちろん、著者が「システムとしての構造(表層構造)」と「規則としての構造(深層構造)」という二種類の構造があるのだ、という柔軟な立場を採っておられることはよく理解できるのではあるが。

第4章においては、ポストモダン社会におけるグローバリゼーション(「世界システム化」と「局所化」)が論じられているが、本書の図4-6に見られるような把握の仕方に若干の疑問を感じた。経済はグローバリゼーション、政治はセミ・グローバリゼーション、文化はローカリゼーションといった見方を著者は提示しているように思えるのである。しかしながら、グローカリゼーションは、経済、政治、文化それぞれの次元でほぼ等しく生じていると考えられる。たとえば、文化において、食に関してはコカ・コーラやマクドナルドやケンタッキーなどのように、衣服に関してはTシャツやジーンズなどのように、文化のグローバリゼーション(この場合はアメリカナイゼーションと重なっている)が生じていることは確かなのである。また、経済においては近年の地域通貨運動の広がりを見て取れるようなローカリゼーションの動きも出てきている。政治においては経済や文化のグローバリゼーションに対抗して民族主義や原理主義が台頭しているが、そこに見られるリ・ナショナルイゼーション(再国民化)や、住民投票やエスノ・ナショナリズム(イギリスのスコットランドやスペインのバスク地方など)から見て取れる地域主義の興隆も存在する。つまり、これまでナショナルな(すなわち国民社会の)レベルに一元化されていた、経済、政治、文化がそれぞれグローバル、リージョナル

(セミ・グローバル)、ナショナル、ローカルなどへと多次元化されていると考えられるのである。とはいえ、著者の主張が基本的に間違っているということではない。グローカリゼーションあるいはダイ・ナショナルリゼーション（脱国民化）の現象に対してより複合的な見方をしてもよかったのではないかと考えられるのである。

第4章に関して、もう一つ気づいたことがある。「ポストモダン思想は、構造主義の深甚な影響と関連づけて論じられる」というくだりについてであるが、著者は構造主義とポスト構造主義との区分をもう少し明確化されたほうがよいように感じた。確かにポスト構造主義は構造主義との連続性を有しているものの、近代を批判的に相対化するポストモダニズムと直接関連しているのは、社会や文化の共時的な深層コードを抽出しようとする構造主義ではなく、コードや秩序の通時的なゆらぎを指摘し、近代的な権威主義的秩序を転倒・相対化するポスト構造主義であるといえるからである。

さらにもう一つ、ポストモダン社会における「大社会」から「小社会」へのシフトという議論に関して言及したい。これは著者がリオタールから着想を得たものだということが示唆されている。しかし、リオタールの考え方をそのまま受け入れていいのか、という疑問が残る。近代の大きな物語（とそれに基づく秩序）が破綻し、共約不可能な小さな物語が多元的・相対的に存立するという、ポストモダン状況をリオタールは示したわけだが、現実の世界はそこまでアナーキーになっておらず、あいかわらず、国家や科学的知識の権威は保たれている。むしろ、システムから生活世界、ナショナルからグローバル、資本や国家から市民社会といったもう少し具体的な動きとして捉えたほうが、著者が構想されている意味の公共性を提示するために有効であるような気がするのである。

以上、本当に瑣末的なコメントばかりになってしまったことをどうか御容赦願いたい。さらに評者の提出した疑問がすべて誤解や勝手な思い込みによる見当違いのものである可能性が極めて高いことをご寛恕を賜りたい。評者としてはそれらが一つでも建設的なコメントとなっていることをひたすら祈るばかりである。

上述したとおり、本書はきわめて完成度の高い、じつに整理の行き届いた著作である。そればかりか、本書は今後の社会理論の展開を望見するための橋頭堡を立派に築き上げている。現代の社会学に関わる者すべてが参照すべき重要な理論的作品が、友枝さんによって書かれたことを、評者は心から祝福したいと思う。